

# PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 2001-318166  
(43)Date of publication of application : 16.11.2001

(51)Int.Cl. G01V 8/20  
G01J 1/02  
G01J 5/02  
G08B 13/19

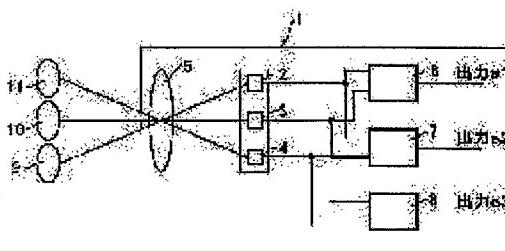
(21)Application number : 2000-136072 (71)Applicant : MATSUDA MICRONICS CORP  
(22)Date of filing : 09.05.2000 (72)Inventor : ASANO TAKESHI

(54) THERMOPILE RADIATION FAR-INFRARED DETECTOR FOR CRIME PREVENTION

(57) Abstract:

**PROBLEM TO BE SOLVED:** To provide a thermopile radiation far-infrared detector for crime prevention which can securely detect a trespasser entering a space irrelevantly to variation in the temperature in the space and the moving speed of the trespasser.

**SOLUTION:** The thermopile radiation far-infrared detecting device detects the trespasser entering the space by using more than three thermopiles. The output difference between the detection value outputted by two thermopiles is compared with the output difference extracted between the mentioned different thermopiles to detect the trespasser.



(19)日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2001-318166

(P2001-318166A)

(43)公開日 平成13年11月16日(2001.11.16)

(51)Int.Cl.<sup>7</sup>

G 0 1 V 8/20

G 0 1 J 1/02

5/02

G 0 8 B 13/19

識別記号

F I

テ-マコ-ト(参考)

G 0 1 J 1/02

W 2 G 0 6 5

R 2 G 0 6 6

B 5 C 0 8 4

5/02

G 0 8 B 13/19

G 0 1 V 9/04

Q

審査請求 有 請求項の数6 OL (全 10 頁)

(21)出願番号

特願2000-136072(P2000-136072)

(22)出願日

平成12年5月9日(2000.5.9)

(71)出願人 397058747

マツダマイクロニクス株式会社

千葉県柏市高田字上野台子1400番地1

(72)発明者 浅野 武士

千葉県柏市高田字上野台子1400番地1 マ

ツダマイクロニクス株式会社内

(72)発明者 矢島 弘之

千葉県柏市高田字上野台子1400番地1 マ

ツダマイクロニクス株式会社内

(74)代理人 100087745

弁理士 清水 善▲廣▼ (外2名)

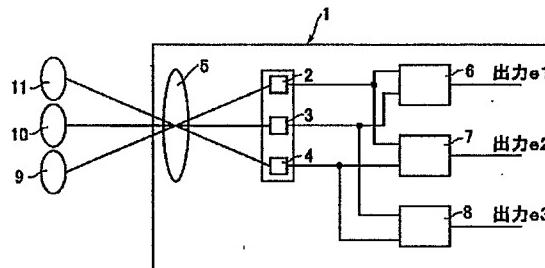
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置

## (57)【要約】

【課題】空間内温度変化や侵入者の移動速度に関わらず、空間内への侵入者の侵入を確実に検出することができる防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を提供すること。

【解決手段】3つ以上のサーモバイルを用いて空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置であって、2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を取り出し、異なる前記サーモバイル間で取り出した出力差同士を比較することで侵入者を検出することを特徴とする防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。



## 【特許請求の範囲】

【請求項1】 3つ以上のサーモバイルを用いて空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置であって、2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を取り出し、異なる前記サーモバイル間で取り出した出力差同士を比較することで侵入者を検出することを特徴とする防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

【請求項2】 前記サーモバイルからの検出値を增幅することなく出力差を取り出すことを特徴とする請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

【請求項3】 9つ以下の前記サーモバイルをアレイ状に配列したことを特徴とする請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

【請求項4】 前記出力差同士の信号差が、第1の設定値以下の場合には侵入者でないと判断し、前記第1の設定値より小さくゼロ以上である第2の設定値以下の場合には検出妨害であると判断することを特徴とする請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

【請求項5】 請求項1から請求項4のいずれかに記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を屋内で設置して用いることを特徴とする屋内設置型防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

【請求項6】 サーモバイルを複数列に複数段アレイ状に配置して空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置であって、列方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差と、段方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差とを取り出してそれぞれの前記出力差を比較することで侵入者を検出することを特徴とする防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置。

## 【発明の詳細な説明】

## 【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は3つ以上のサーモバイルを用いて空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置、および屋内設置型防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置に関する。

## 【0002】

【従来の技術】 従来、事務所のような空間内への侵入者の侵入を検出する方法としては、人体から発する体温、すなわち放射遠赤外線を検出する方法が知られており、その検出装置の検出器としては、焦電素子、サーモバイル等の赤外線受動検出素子が使用されている。一般的に使用されている焦電素子は、熱の変化を捉える素子であり、所定以上の速度で侵入した場合に有効である。先ず、従来の焦電素子を1個用いた場合の検出方法について図9から図12を用いて説明する。図9は、焦電素子を備えた検出器aの前方にレンズbを配設した検出装置cを示している。図中dは、空間内を移動する人体を示

している。人体dから放射される放射遠赤外線は、レンズbを用いて検出器aに集束される。検出器aは、この放射遠赤外線量が変化すると電気信号を出力し、この出力で空間内に侵入者が侵入したか否かを検出する。図10および図11は、空間内を人体dが移動している場合の検出器aからの出力変化を示している。人体dが検出空間内に入った時に検出器aは、人体dの体温を検出し、それを電気的信号として出力する。人体dの移動にともなって経時的に出力値は上下に変化する。次に、検出空間内に人体dが存在する時には、検出器aに入る遠赤外線量は一定のため出力変化は現われない。そして、人体dが検出空間より出る時に検出器aは、人体dの体温を検出し、それを電気的信号として出力する。人体dの移動にともなって経時的に出力値は上下に変化する。ここで、図10は人体dが早い速度で移動する場合、図11は人体dが遅い速度で移動する場合を示している。図10と図11から明らかなように、人体dがあるスピードで空間内を移動している場合には、人体dの変化を捉えることが容易であるが、人体dがゆっくりと移動または静止状態にいる時は、検出器aが体温と室温との差異を明確に検出することができない。このように焦電素子を用いて検出する場合、侵入者の侵入スピードが遅い場合や静止状態には、侵入者と空間内の背景温度との変化、すなわち侵入者の体温と室温との差異を区別することができずに入侵者を確実に検出することができない。一方、サーモバイルは焦電素子とは異なり、熱の変化を捉えるのではなく、熱の絶対値を検出する素子であるので、通常は放射温度計として測定対象物の熱の絶対値を測定することに用いられる。従来のサーモバイルを図9に示す構成で用いた場合の人体dの移動に伴う出力変化を図12に示す。図12では、室温が25度の場合と、室温が25度よりも高い場合と、室温が25度よりも低い場合との出力変化を示している。図13は、サーモバイルの放射遠赤外線検出を焦電素子の検出状態と同じになるように出力信号を処理する場合の出力変化を示している。また、複数のサーモバイルを二次元配置した熱画像デバイスを用い、その出力を各々素子毎に取り出し、全素子の各出力を熱画像として取り扱い、空間内に侵入した侵入者を検出する方法もある。サーモバイルを多素子用いた場合の従来の構成について図14から図17を用いて説明する。図14は、可変増幅器j1、j2、j3を備えた検出器e1、e2、e3の前方にレンズfを配設した検出装置gを示している。図中h1、h2、h3は検出器e1、e2、e3が検出可能な空間を示している。空間h1、h2、h3のいずれかを人体が移動すると、人体の体温を、レンズfを介して検出器e1、e2、e3のいずれかで検出し、検出した放射遠赤外線、すなわち体温を電気出力として可変増幅器j1、j2、j3で増幅して電気信号出力k1、k2、k3として出力する。そしてこの出力k1、k2、k3の変化

3  
によって侵入者が侵入したか否かを検出する。すなわち、空間h1、h2、h3の熱分布を常時測定し、侵入者が空間h1、h2、h3内に存在しない時は、図15Aに示すように出力k1、k2、k3の差異はほとんどないが、空間h1、h2、h3内に侵入者が侵入すれば図15Bに示すように人体の体温により空間h1、h2、h3のいずれかの温度が高まり、それに伴って可変増幅器j1、j2、j3からの出力k1、k2、k3に差異が生じる。図15Bは、空間h2に侵入者が侵入したことを見ている。検出器e1、e2、e3の数を増やせば、所定範囲内の熱分布を詳細にとらえることが可能となり、全検出空間を画像（赤外線画像）として捉えることができ、空間内への侵入者の侵入を画像として確認することができる。なお、図16はサーモバイルの室温変化とともに出力変化を示している。同図に示すように、室温が低い場合と室温が高い場合とでは出力が飽和して適切な出力が出なくなる。そこで、室温が低い場合は感度を上げるようにし、室温が高い場合は感度を下げるようとする必要がある。そこで、図17に示すように、可変増幅器j1、j2、j3の入力側と出力側とを自動感度調整器mに接続し、可変増幅器j1、j2、j3からの出力k1、k2、k3が平均値を維持するように可変増幅器j1、j2、j3で調整している。図17に従来の他の検出装置を示す。同図に示す検出装置は、複数の検出器e1、e2、e3、e4、e5と各検出器から得られた出力を増幅させる増幅器nとを電子スイッチpを介して接続したものである。そして、電子スイッチpを順次切り替えることで各検出器e1、e2、e3、e4、e5の出力を検出し、増幅器nで増幅させて出力している。

## 【0003】

【発明が解決しようとする課題】しかし、サーモバイルを用いた場合でも、単一のサーモバイルを用いた場合には、図12に示すように室温が高い場合は室温と体温との差異z1がほとんどないため、出力変化が十分に検出できず、人体を的確に捉えて出力することができない。また室温が低い場合は、室温と体温との差異z2が大きいため体温を的確に捉えて出力することができるが、室温の変化を検出してしまことになる。従って、室温変化を検出しないように検出感度を下げる、人体の侵入による温度差を検出できないという問題を生じてしまう。そこで、図13に示すように、人体が検出空間内に入った時および出た時に、その温度変化を電気的信号に変換させて出力させることで人体の侵入を検出する方法も考えられる。しかし、この場合には、焦電素子を用いた検出方法と同様に検出空間内を人体がゆっくりと移動した場合、または静止状態の場合は検出することができないという問題がある。また、複数のサーモバイルを用いた図14や図17に示す構成であっても、室温の変化の方が人体温度による変化よりも大きいため、侵入を検

出することができない。また、サーモバイル等の赤外線受動検出素子を多数個二次元配置した熱画像デバイスを用い、その出力を各々素子毎に取り出し、全素子の各出力を熱画像として取り扱って侵入者を検出する方法では、予め各素子の出力が検出可能な範囲内になるように自動感度調整を行う必要がある。つまり、空間内温度は、季節、昼夜、或いはドアや窓の開閉によって変化するので、室温の変化に合わせて、予め自動感度調整を行わねばならず、感度調整が煩雑になるという問題がある。更に、自動感度調整を行った場合でも、室温の分布が、この最大値或いは最小値の両方にまたがっている場合は検出することができないという問題がある。このように従来の検出装置では、各検出器の出力が室温の上昇または下降に伴って変化するため、室温の変化とともに各検出器の自動感度調整を行える自動感度調整機能を備えた増幅器としなければ、検出空間に侵入者が侵入したか否かを検出することができない。なお、この種の検出装置では、検出器の前面に遮蔽板を置いて検出不可能とする妨害（画策）を検出できることが重要である。また、屋外などプライバシー保護を必要としない場合には、熱画像として捉える従来の検出装置であってもプライバシーの問題は生じないが、会社事務所、倉庫等のような屋内、特に一般家庭内に検出装置を設置する場合には、居住者や外来者を熱画像として捉えてモニターできる従来の検出装置では個人のプライバシー侵害の問題が生じる恐れがある。

【0004】そこで本発明はかかる問題点を解消し、空間内温度変化や侵入者の移動速度に関わらず、空間内への侵入者の侵入を確実に検出することができる防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を提供することを目的とする。また本発明は、検出不可能とする妨害（画策）を検出できる防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を提供することを目的とする。また本発明は、個人のプライバシー侵害の問題が生じる恐れがない防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を提供することを目的とする。

## 【0005】

【課題を解決するための手段】請求項1記載の本発明の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置は、3つ以上のサーモバイルを用いて空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置であって、2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を取り出し、異なる前記サーモバイル間で取り出した出力差同士を比較することで侵入者を検出することを特徴とする。請求項2記載の本発明は、請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置において、前記サーモバイルからの検出値を増幅することなく出力差を取り出すことを特徴とする。請求項3記載の本発明は、請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置において、9つ以下の前記サーモバイルをアレイ

状に配列したことを特徴とする。請求項4記載の本発明は、請求項1記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置において、前記出力差同士の信号差が、第1の設定値以下の場合には侵入者でないと判断し、前記第1の設定値より小さくゼロ以上である第2の設定値以下の場合には検出妨害であると判断することを特徴とする。請求項5記載の本発明の屋内設置型防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置は、請求項1から請求項4のいずれかに記載の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を屋内で設置して用いることを特徴とする。請求項6記載の本発明のサーモバイル放射遠赤外線検出装置は、サーモバイルを複数列に複数段アレイ状に配置して空間内への侵入者を検出する防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置であって、列方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差と、段方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差とを取り出してそれぞれの前記出力差を比較することで侵入者を検出することを特徴とする。

## 【0006】

【発明の実施の形態】本発明の第1の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置は、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を取り出し、異なるサーモバイル間で取り出した出力差同士を比較することで侵入者を検出するもので、背景温度の変化、すなわち朝、昼、夕方等の外気の温度変化に伴う空間内の温度変化、春夏秋冬のような季節における気温の変化は、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を取り出すことで相殺されるため差出力としては出力されない。すなわち背景温度が変化しても、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差は基本的にはゼロに近い値となる。従って背景温度の変化を補正する自動感度調整も必要としない。一方、いずれか1つのサーモバイルの検出エリア内に侵入者が侵入した場合、侵入者から発する遠赤外線の放射量が変化してそのサーモバイルが関係する出力差のみが他の出力差と異なった出力値となるために侵入者の存在を確実に検出することができる。このとき、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差は基本的にはゼロに近い値であるため、出力差を増幅器によって大幅に増幅しても、その出力値は異常に大きくなることはない。従って、出力差を増幅することで、更に検出感度を上げることができる。

【0007】本発明の第2の実施の形態は、第1の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置において、サーモバイルからの検出値を増幅することなく出力差を取り出すもので、増幅器のノイズや誤差に影響されずに正確に出力差を得ることができる。

【0008】本発明の第3の実施の形態は、第1の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置

において、9つ以下のサーモバイルをアレイ状に配列したもので、多数のサーモバイルを用いて熱画像として取り扱わなくても正確に侵入者を検出することができるとともに、個人のプライバシーが守られていることを示すことができる。

【0009】本発明の第4の実施の形態は、第1の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置において、出力差同士の信号差が、第1の設定値以下の場合には侵入者でないと判断し、第1の設定値より小さくゼロ以上である第2の設定値以下の場合には検出妨害であると判断するもので、検出器の前面に遮蔽板を置いて検出できないようにする妨害（画策）を検出することができる。すなわち、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差は、通常はほとんどゼロに近いが、通常背景温度はわずかの差があるため、完全に全ての出力差がゼロ又はゼロに限りなく近くなることはない。しかし、検出器の前面に遮蔽板を置いて検出しないように妨害（画策）を行った場合、遮蔽板は均一には同一出力差となるため、この状態を利用して遮蔽板を用いた検出妨害であることを検出することができる。

【0010】本発明の第5の実施の形態による屋内設置型防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置は、第1から第4の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置を屋内で設置して用いるもので、第1から第4の実施の形態による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置では、2つのサーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差を用いるために、画像を再現することはできない。従って、サーモバイルの素子数が多くても赤外線カメラのような熱画像を再現することはできないので、プライバシーの問題を生じることなく、会社事務所、倉庫等のような屋内、特に一般家屋内に設置することに適している。

【0011】本発明の第6の実施の形態によるサーモバイル放射遠赤外線検出装置は、列方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差と、段方向に配置した2つの前記サーモバイルから出力されるそれぞれの検出値の出力差とを取り出してそれぞれの前記出力差を比較することで侵入者を検出するもので、監視場所の高さ方向の出力差が小動物では大となり侵入者では小となる違いを検出することで、小動物による誤検出を防止することができる。

## 【0012】

【実施例】以下に、本発明の防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置の一実施例を図面に基づいて説明する。図1および図2により、本発明の同検出装置の基本原理を説明する。図1に示すように検出装置1は、遠赤外線を検出可能なサーモバイルからなる検出器2、3、4の前方に凸レンズ5を配置し、また検出器2、3、4の検出値を増幅させるための増幅器6、7、8を設けたものである。検出器2は増幅器6と増幅器7に接続し、検出

器3は増幅器6と増幅器8とに接続し、更に検出器4は増幅器7と増幅器8とに接続している。ここで増幅器6は検出器2と検出器3の出力差を、また増幅器7は検出器2と検出器4の出力差を、更に増幅器8は検出器3と検出器4の出力差を増幅させる。検出装置1は、空間、例えば事務所内の天井付近に設置し、レンズ5を介して空間内を検出空間9、10、11に区分けして侵入者の侵入を検出する。そして検出器2、3、4の出力は、個々に比較するのではなく、1つの検出器に対して他のいずれかの検出器との出力差、すなわち増幅器6では検出器2と検出器3との出力差を増幅し、増幅器7では検出器3と検出器4との出力差を増幅し、また増幅器8では検出器2と検出器4との出力差を増幅している。このように増幅器では、2つの検出器からの検出値の出力差を増幅させるようにしたので、検出する空間の温度、所謂室温には何ら影響されることがない。すなわち、室温が上昇した場合には、検出器2の出力が上がったとしてもその他の検出器3の出力も同様に上がる所以、図2に示すように検出器間の出力差は生じないから、増幅器の出力は変化しない。従って、本実施例によれば、各検出器間の自動感度調整は不要である。

【0013】次に、同検出装置1における検出部の構成を図3から図6を用いて説明する。図3は、サーモバイルの配列構成を示している。検出空間を面状で捉えるために、面のX軸方向およびY軸方向に複数のサーモバイルをアレイ状に配列する。同図(A)は4つのサーモバイル2aを、同図(B)は5つのサーモバイル2bを、同図(C)は6つのサーモバイル2cを、同図(D)は9つのサーモバイル2dを、同図(E)はn×mのサーモバイル2eを、それぞれアレイ状に配列したものである。なお、少なくとも3つのサーモバイルがあればよく、多くなればそれだけ侵入空間を特定できる効果はあるが、9つのサーモバイル以下でも十分効果を發揮することができる。図4は、3つのサーモバイル12a、12b、12cを用いた検出部12の構成図であり、検出部12は、アレイ状に配列されたサーモバイル12a、12b、12cの前方にレンズ5を配設して構成している。サーモバイル12a、12b、12cはレンズ5を介して検出空間13a、13b、13cへの侵入者の侵入を検出する。図5は図4に示すレンズ5の代わりに凹面鏡14を用いた実施例である。検出空間13a、13b、13cに侵入者が侵入した際に、侵入者からの体温を凹面鏡14で反射させてサーモバイル12a、12b、12cのいずれかで検出するようにしている。図6は図4に示すレンズ5の代わりに2個の凹面鏡14a、14bを用いた実施例である。2個の凹面鏡14a、14bを用いることで、侵入者からの体温の検出を検出空間13a、13b、13cおよび検出空間13d、13e、13fの広範囲で行えるようにしたものである。例えばサーモバイル12bは、検出空間13bの場合は凹

面鏡14aで、検出空間13eの場合は凹面鏡14bで反射させることで検出空間13bと検出空間13eを検出することができる。2個の凹面鏡の代わりに2個のレンズを用いても同様に検知空間範囲を広げることができる。同様に凹面鏡あるいはレンズを2個以上の多数個用いれば、更に広範囲の検出空間で検知を行うことができる。

【0014】更に他の実施例を図7に示す。本実施例の検出装置1は、複数のサーモバイル2a、2b、2c、2d、2eと、各サーモバイル2a、2b、2c、2dとサーモバイル2eとの出力差(出力1から出力4)を増幅させる増幅器15とを電子スイッチ16を介して接続している。そして電子スイッチ16を切り替えることで、それぞれの出力差(出力1から出力4)を順次検出するものである。出力差Eは次式のように表される。

$$E = |2a - 2e|, |2b - 2e|, |2c - 2e|, |2d - 2e|$$

室温が上昇または下降した際に変化した時、室温変化に伴いサーモバイル2a、2b、2c、2d、2eの温度も同時に変化するため、通常では、出力差Eはゼロ又は極めてゼロに近い値である。そして、検出空間内に侵入者が侵入した際、侵入者の体温を検出したサーモバイルは、他のサーモバイルと検出値が異なるため、侵入の検出が的確に行える。なお、サーモバイル間の出力差Eを得るために、上記実施例ではサーモバイルeを基準としたが、サーモバイルeに代えて他のサーモバイル2a、2b、2c、2dのいずれを基準としてもよく、また必ずしも基準のサーモバイルを1つに限る必要もない。

【0015】更に他の実施例を図8を用いて説明する。図8において、hA、hB、hC、hDはそれぞれ監視空間を示しており、監視空間hAと監視空間hB、監視空間hDと監視空間hCとは高さ方向(列方向)に位置し、監視空間hAと監視空間hD、監視空間hBと監視空間hCとは水平方向(段方向)に位置する空間を示している。すなわち図示しないが本実施例では2段2列にサーモバイルを配置している。図中dは侵入者を、zは小動物を示している。同図(a)に示すように、侵入者dが図面の左方向に移動する場合を想定すると、列方向の監視空間hDと監視空間hCとの出力差、監視空間hAと監視空間hBとの出力差は生じない。ただし段方向の監視空間hDと監視空間hAとの出力差、監視空間hCと監視空間hBとの出力差は生じる。これに対し、同図(b)に示すように、小動物zが図面の左方向に移動する場合を想定すると、列方向の監視空間hDと監視空間hCとの出力差、監視空間hAと監視空間hBとの出力差は生じ、また下段の監視空間hCと監視空間hBとの出力差は生じる。ただし上段の監視空間hDと監視空間hAとの出力差は生じない。以上のように、監視場所の高さ方向(監視空間hAと監視空間hB又は監視空間hDと監視空間hC)の出力差が小動物では大となり侵

入者では小となる違いを検出することで、小動物による誤検出を防止することができる。

【0016】

【発明の効果】上記実施例の説明から明らかなように、本発明によれば、侵入者の侵入の検出を侵入者の体温と室温との差異を熱画像として捉えて検出するのではなく、人体から放射される遠赤外線放射量をサーモバイル間の出力差で検出するため、室温の変化に影響されることなく、侵入を的確に検出することができる。また、本発明によれば、侵入者が検出装置の検出の妨害を図るために、検出装置の前面を遮蔽板で遮蔽しても、この画策を検出することができる。また、本発明によれば、サーモバイルからの出力を画像として捉えるのではなく、最初から各素子間の出力差で検出できるようにしたので、プライバシー保護ができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施例による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置の基本構成図

【図2】同検出装置の各サーモバイル間の出力を示す線図

【図3】同サーモバイルの配列を示す構成図

【図4】本発明の実施例による3つのサーモバイルを用いた検出部の構成図

【図5】本発明の他の実施例による検出部の構成図

\* 【図6】本発明の更に他の実施例による検出部の構成図

【図7】本発明の実施例による検出装置の構成図

【図8】本発明の他の実施例を説明するための構成図

【図9】従来の検出装置の構成図

【図10】同検出装置の検出空間内で人体が速く移動した場合の時間と出力との関係を示す線図

【図11】同検出装置の検出空間内で人体が遅く移動した場合の時間と出力との関係を示す線図

【図12】サーモバイルを用いた検出装置での室温と出力との関係を示す線図

【図13】同検出装置の出力信号を処理する方法を説明するための室温と出力との関係を示す線図

【図14】他の従来例による検出装置の構成図

【図15】同検出装置の検出空間と出力との関係を示す線図

【図16】同検出装置の室温が変化とともになう出力状態を示す線図

【図17】更に他の従来例による検出装置の構成図

【符号の説明】

1 検出装置

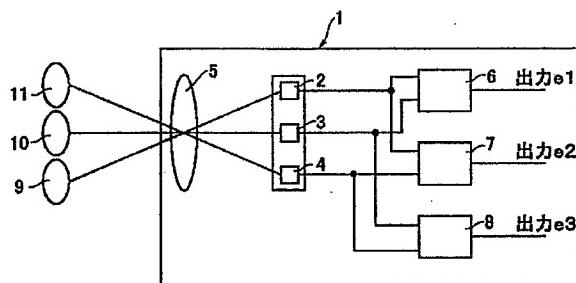
2、3、4 検出器

2a、2b、2c、2d、2e サーモバイル

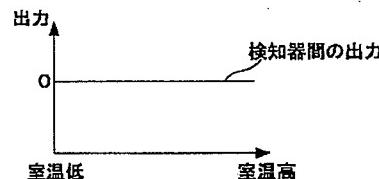
6、7、8、15 増幅器

12a、12b、12c サーモバイル

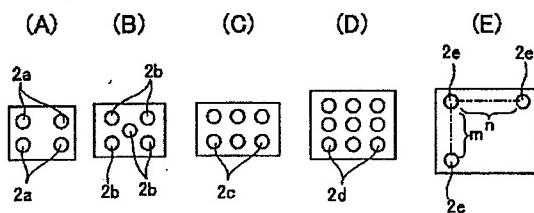
【図1】



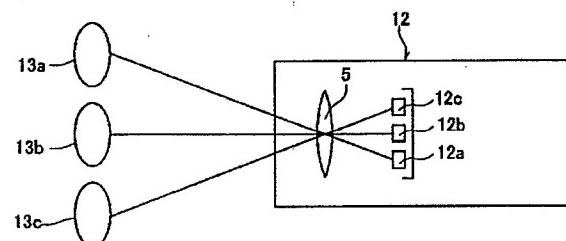
【図2】



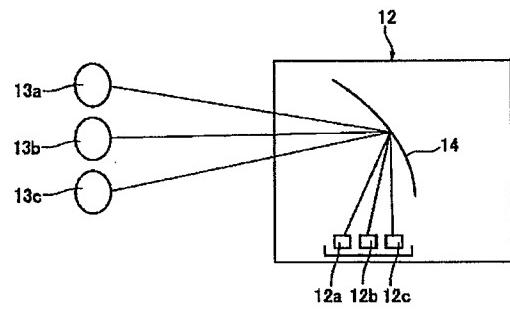
【図3】



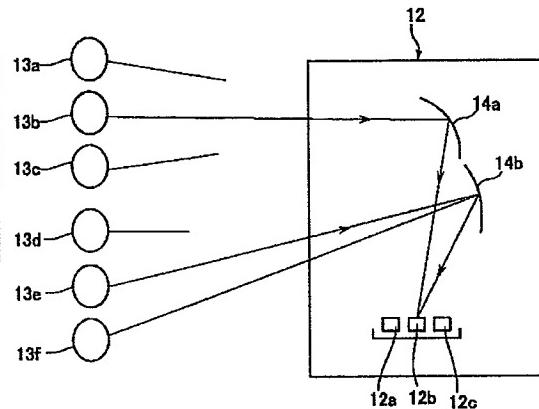
【図4】



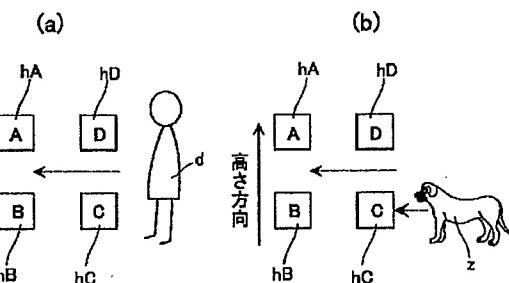
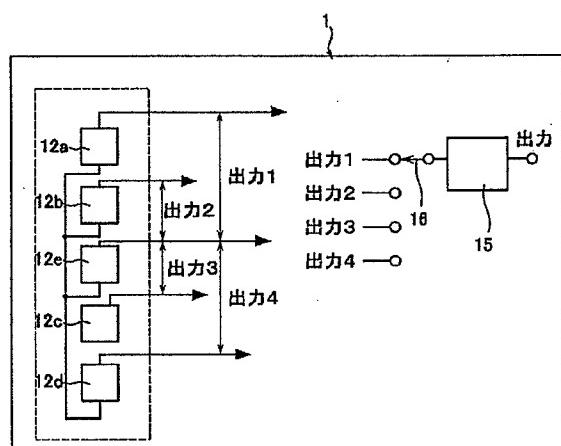
【図5】



【図6】

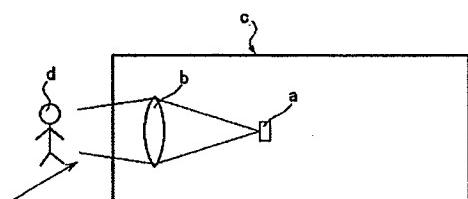


【図7】



【図11】

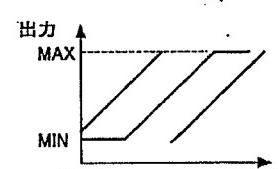
【図9】



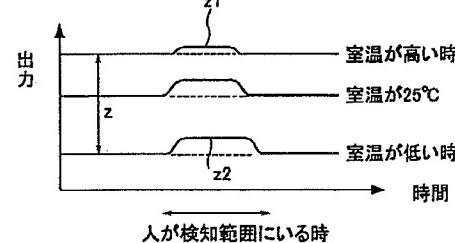
【図10】



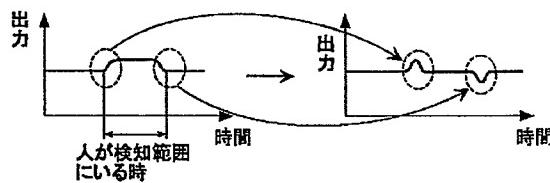
【図16】



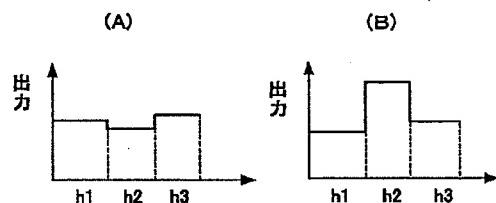
【図12】



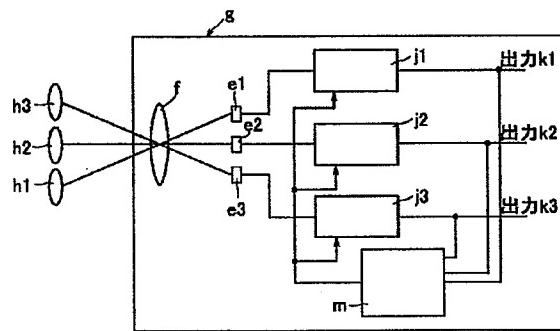
【図13】



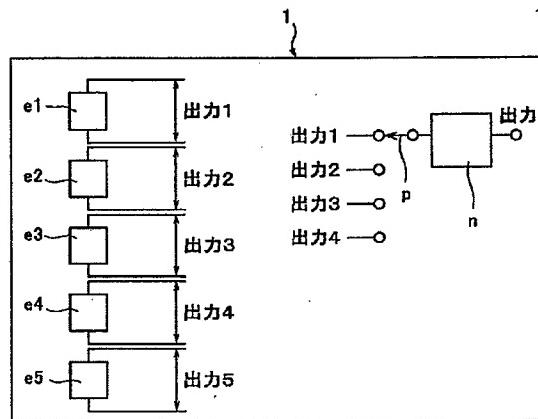
【図15】



【図14】



【図17】



## 【手続補正書】

【提出日】平成13年7月18日(2001.7.1  
8)

## 【手続補正1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0002

【補正方法】変更

【補正内容】

【0002】

【従来の技術】従来、事務所のような空間内への侵入者の侵入を検出する方法としては、人体から発する体温、すなわち放射遠赤外線を検出する方法が知られており、その検出装置の検出器としては、焦電素子、サーモバイル等の赤外線受動検出素子が使用されている。一般的に使用されている焦電素子は、熱の変化を捉える素子であり、所定以上の速度で侵入した場合に有効である。先ず、従来の焦電素子を1個用いた場合の検出方法について図9から図12を用いて説明する。図9は、焦電素子を備えた検出器aの前方にレンズbを配設した検出装置

cを示している。図中dは、空間内を移動する人体を示している。人体dから放射される放射遠赤外線は、レンズbを用いて検出器aに集束される。検出器aは、この放射遠赤外線量が変化すると電気信号を出力し、この出力で空間内に侵入者が侵入したか否かを検出する。図10および図11は、空間内を人体dが移動している場合の検出器aからの出力変化を示している。人体dが検出空間内に入った時に検出器aは、人体dの体温を検出し、それを電気的信号として出力する。人体dの移動とともに経時的に出力値は上下に変化する。次に、検出空間内に人体dが存在する時には、検出器aに入る遠赤外線量は一定のため出力変化は現われない。そして、人体dが検出空間より出る時に検出器aは、人体dの体温を検出し、それを電気的信号として出力する。人体dの移動とともに経時的に出力値は上下に変化する。ここで、図10は人体dが早い速度で移動する場合、図11は人体dが遅い速度で移動する場合を示している。図10と図11から明らかなように、人体dがあるスピ

ードで空間内を移動している場合には、人体dの変化を捉えることが容易であるが、人体dがゆっくりと移動または静止状態にいる時は、検出器aが体温と室温との差異を明確に検出することができない。このように焦電素子を用いて検出する場合、侵入者の侵入スピードが遅い場合や静止状態には、侵入者と空間内の背景温度との変化、すなわち侵入者の体温と室温との差異を区別することができずに侵入者を確実に検出することができない。一方、サーモバイルは焦電素子とは異なり、熱の変化を捉えるのではなく、熱の絶対値を検出する素子であるので、通常は放射温度計として測定対象物の熱の絶対値を測定することに用いられる。従来のサーモバイルを図9に示す構成で用いた場合の人体dの移動に伴う出力変化を図12に示す。図12では、室温が25度の場合と、室温が25度よりも高い場合と、室温が25度よりも低い場合との出力変化を示している。図13は、サーモバイルの放射遠赤外線検出を焦電素子の検出状態と同じになるように出力信号を処理する場合の出力変化を示している。また、複数のサーモバイルを二次元配置した熱画像デバイスを用い、その出力を各々素子毎に取り出し、全素子の各出力を熱画像として取り扱い、空間内に侵入した侵入者を検出する方法もある。サーモバイルを多素子用いた場合の従来の構成について図14から図17を用いて説明する。図14は、可変増幅器j1、j2、j3を備えた検出器e1、e2、e3の前方にレンズfを配設した検出装置gを示している。図中h1、h2、h3は検出器e1、e2、e3が検出可能な空間を示している。空間h1、h2、h3のいずれかを人体が移動すると、人体の体温を、レンズfを介して検出器e1、e2、e3のいずれかで検出し、検出した放射遠赤外線、すなわち体温を電気出力として可変増幅器j1、j2、j3で増幅して電気信号出力k1、k2、k3として出力する。そしてこの出力k1、k2、k3の変化によって侵入者が侵入したか否かを検出する。すなわち、空間h1、h2、h3の熱分布を常時測定し、侵入者が空間h1、h2、h3内に存在しない時は、図15Aに示すように出力k1、k2、k3の差異はほとんどないが、空間h1、h2、h3内に侵入者が侵入すれば図15Bに示すように人体の体温により空間h1、h2、h3のいずれかの温度が高まり、それに伴って可変増幅器j1、j2、j3からの出力k1、k2、k3に差異が生じる。図15Bは、空間h2に侵入者が侵入したことを見ている。検出器e1、e2、e3の数を増やせば、所定範囲内の熱分布を詳細にとらえることが可能となり、全検出空間を画像（赤外線画像）として捉えることができ、空間内への侵入者の侵入を画像として確認することができる。なお、図16はサーモバイルの室温変化にともなう出力変化を示している。同図に示すように、室温が低い場合と室温が高い場合とでは出力が飽和して適切な出力が出なくなる。そこで、室温が低い場

合は感度を上げるようにし、室温が高い場合は感度を下げるようとする必要がある。そこで、図14に示すように、可変増幅器j1、j2、j3の入力側と出力側とを自動感度調整器mに接続し、可変増幅器j1、j2、j3からの出力k1、k2、k3が平均値を維持するよう可変増幅器j1、j2、j3で調整している。図17に従来の他の検出装置を示す。同図に示す検出装置は、複数の検出器e1、e2、e3、e4、e5と各検出器から得られた出力を増幅させる増幅器nとを電子スイッチpを介して接続したものである。そして、電子スイッチpを順次切り替えることで各検出器e1、e2、e3、e4、e5の出力を検出し、増幅器nで増幅させて出力している。

#### 【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0014

【補正方法】変更

【補正内容】

【0014】更に他の実施例を図7に示す。本実施例の検出装置1は、複数のサーモバイル12a、12b、12c、12d、12eと、各サーモバイル12a、12b、12c、12dとサーモバイル12eとの出力差（出力1から出力4）を増幅させる増幅器15とを電子スイッチ16を介して接続している。そして電子スイッチ16を切り替えることで、それぞれの出力差（出力1から出力4）を順次検出するものである。出力差Eは次式のように表される。 $E = |\underline{12a} - \underline{12e}|, |\underline{12b} - \underline{12e}|, |\underline{12c} - \underline{12e}|, |\underline{12d} - \underline{12e}|$  室温が上昇または下降した際に変化した時、室温変化に伴いサーモバイル12a、12b、12c、12d、12eの温度も同時に変化するため、通常では、出力差Eはゼロ又は極めてゼロに近い値である。そして、検出空間内に侵入者が侵入した際、侵入者の体温を検出したサーモバイルは、他のサーモバイルと検出値が異なるため、侵入の検出が的確に行える。なお、サーモバイル間の出力差Eを得るために、上記実施例ではサーモバイル12eを基準としたが、サーモバイル12eに代えて他のサーモバイル12a、12b、12c、12dのいずれを基準としてもよく、また必ずしも基準のサーモバイルを1つに限る必要もない。

#### 【手続補正3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】図面の簡単な説明

【補正方法】変更

【補正内容】

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施例による防犯用サーモバイル放射遠赤外線検出装置の基本構成図

【図2】同検出装置の各サーモバイル間の出力を示す線図

【図3】同サーモバイルの配列を示す構成図

【図4】本発明の実施例による3つのサーモバイルを用いた検出部の構成図

【図5】本発明の他の実施例による検出部の構成図

【図6】本発明の更に他の実施例による検出部の構成図

【図7】本発明の実施例による検出装置の構成図

【図8】本発明の他の実施例を説明するための構成図

【図9】従来の検出装置の構成図

【図10】同検出装置の検出空間内で人体が速く移動した場合の時間と出力との関係を示す線図

【図11】同検出装置の検出空間内で人体が遅く移動した場合の時間と出力との関係を示す線図

【図12】サーモバイルを用いた検出装置での室温と出力との関係を示す線図

【図13】同検出装置の出力信号を処理する方法を説明\*

\*するための室温と出力との関係を示す線図

【図14】他の従来例による検出装置の構成図

【図15】同検出装置の検出空間と出力との関係を示す線図

【図16】同検出装置の室温が変化とともになう出力状態を示す線図

【図17】更に他の従来例による検出装置の構成図

【符号の説明】

1 検出装置

2、3、4 検出器

2a、2b、2c、2d、2e、 サーモバイル

6、7、8、15 増幅器

12a、12b、12c、12d、12e サーモバイル

フロントページの続き

F ターム(参考) 2G065 AB03 BA11 BA13 BA33 BA34  
 BC03 BC14 CA21 DA01 DA20  
 2G066 AC13 AC16 BA01 BA08 BB11  
 CA02 CA08 CB01  
 5C084 AA02 AA07 BB04 BB40 CC19  
 DD41 EE01 EE03 GG21 GG56  
 GG57